

平成 22 年 6 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19592608

研究課題名 (和文) 戦争体験がその後の人生に与えた影響  
～心的外傷の観点から見た学童疎開体験

研究課題名 (英文) Japanese Schoolchildren's Experience of Mass Evacuation in World War II and Its long-term influence on their Later Life.

研究代表者

出口 禎子 (DEGUCHI SACHIKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：00269507

研究成果の概要 (和文)：日本では太平洋戦争時に 58 万人が学童疎開を経験した。本研究では、疎開生活の実態と疎開が人生に与えた影響について当事者にインタビューした。その結果、親から切り離された孤立無援感、飢餓、いじめなど共通の外傷体験がある一方、疎開地で友人の死を目撃し今も罪悪感に苦しんでいる人、東京大空襲で家族を亡くした人など、戦争による心的外傷は複合的に重なり、現在の生活に影響を残している事例があることが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

In Japan, five hundred eighty thousand children at their school age experienced the mass evacuation from their home during World War II. Ten survivors of the mass evacuation were interviewed regarding their experiences and influences on their later lives.

As a result, the common experiences like hunger, bullying and helplessness were identified. But there were people who had traumatized by the devastating events during/after the mass evacuation. For example some of them had been feeling guilty from witnessing his/her friend's death and some had to live their lives as orphans as they lost whole families by the air raid in Tokyo. Their narratives suggested that there were many aged people who had to go through multiple traumas during /after the mass evacuation and were afflicted by those traumatic experiences still now.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：戦争体験、学童疎開、集団生活、心的外傷後ストレス障害、

### 1. 背景

近年、日本では自然災害や社会的事件等を機に、被害者の心的外傷後ストレス障害(PTSD)が注目されるようになった。諸外国では第1次世界大戦以降、戦争が人々に及ぼす影響についての研究が多数行われているが、日本では、太平洋戦争で多くの国民が被災したにもかかわらず、体系的な研究は行われていない。中でも、当時学童疎開を経験した人は58万人と言われているが、子どもの戦争体験について体験記はあっても、その後の影響を含めて研究はほとんどなされていない。そこで、今回、学童疎開体験の実態を調査し、疎開体験がその後の人生に与えた影響と意味について研究することにした。

### 2. 研究の目的

太平洋戦争時、学童疎開を体験した人の語りを通して、その体験の意味とそれが後の人生に与えた影響を明らかにし、戦争による子どもの心的外傷について考察する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究参加者

太平洋戦争時に学童疎開を体験し、現在関東近辺に住む人、10名程度。

#### (2) 研究方法

1回2時間程度のインタビュー。インタビューは録音し、その逐語録をもとに分析する。質問内容は、①疎開先で体験したこと、対人関係など、②学童疎開の体験がその後の生活や健康に与えた影響について、であり、自由に語ってもらう。

#### (3) 分析方法

ナラティブリサーチの方法に基づき、語りの中からエピソードを抽出し、ストーリーを再構成する。

### 4. 結果と考察

太平洋戦争時に学童疎開を体験したのは、当時8-12歳の子どもたちであり、その疎開体験は付き添った大人との関係や振り分けられた場所や子どもの数などによっても大きな違いがあった。

(1) 疎開生活を辛かったと語る人たちには「飢餓」「いじめ」「寂しさ」といった共通の外傷体験があった。

(2) 疎開生活よりも、戦後の方が辛かったと語る人も複数いた。

たとえば、いじめを目撃した罪悪感の上に疎開地の地震で友人の死を目撃した罪悪感を現在も抱えている人がいたり、東京大空襲で家族が死亡し、疎開していた自分だけが生き残ったという負い目を抱えて戦争孤児として生き抜いてきた人もいた。

また、疎開先で雑魚寝をした経験から、現在でも友人と泊りがけの旅行ができない、集団が怖い、苦手という人がいた。

(3) それぞれに受けた心の傷は見えない形で今も影を落としていたが、この経験を意味あるものにしようと努力する人々もいた。

(4) 戦時中の外傷体験が現在の生活や健康状態に影響しているのではと考えられるケースでも、実際にそう自覚していない人もおり、中には、中年以降になってフラッシュバックのように失神を繰り返す人もいたが、今

となつては戦争体験との直接的なつながりを証明することは出来なかった。今後、戦争を体験した高齢者の健康や生活を心的外傷という視点から見ていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

出口禎子、武井麻子

戦争を体験した人たちのライフストーリー  
ー 複合的外傷体験としての疎開物語ー、  
日本保健医療社会学会、2009.5.16、熊本大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

出口 禎子 (DEGUCHI SACHIKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号: 00269507

##### (2) 研究分担者

武井 麻子 (TAKEI ASAKO)

日本赤十字看護大学・看護学部

研究者番号: 70216836

(3) 連携研究者  
(なし)

研究者番号: